

クリスマスおめでとうございます。弘前学院聖愛校友会のクリスマスで、皆様にお会いできまして、とても嬉しいです。

今年から、東京支部長は交代をして、若いAさんになりました。礼拝のお話しを、若い方から聞けるものと、皆様、楽しみにしておられたでしょうね。ご期待に沿えず、申し訳ありません。でも、私のせいではありません。Aさんはピアニストと聞いていますが、話してくれる人を捜す時、ピアノニッショで、ノックなさったのではないかしら?と思います。私たち弘前学院聖愛の卒業生は「求めなさい。そうすれば、与えられる。探さなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」(マタイ7:7)という聖書の言葉をすでにインプットされているはず。これからは、クレッシェンドで、フォルテで、門をたたき続けられますようになさってくださいね。

前支部長のKさんから頼まれて、私にお鉢が回ってきました。私はKさんには弱いのです。聖愛を大事に考えて、東京支部を守ってこられたKさんの熱意には負けます。校友の皆様を、大事に考えてこられた、愛の力は強いのだ、とつくづく思います。

私たちの母校「聖愛」は、日本の果ての、津軽の、小さな学校ですが、名前はどんな学校にも負けてはいません。「聖愛」とはギリシャ語でアガペ、つまり、「神の愛」という意味です。「神の愛」を学校名としています。私たちは毎朝、聖書を読み、讃美歌を歌い、お祈りをして、礼拝して、「神の愛」を心に刻まれて、学生時代を過ごしてきたのです。若かったあの頃、難しい話だ、私とは関係ない、ピンとこない、とか、他のことに夢中だったりして、しっかりと受け止めることは難しかったのは、私だけではないでしょう。

卒業生の私たちは、学校を通して、「聖愛」、「神の愛」という目に見えない絆でつながっています。このことを忘れてはいけないと思うのです。「神の愛」を教えてくれるキリスト教主義学校の卒業生は、日本全国でもほんのわずかしら、いません。私たちは、貴重な存在だといえると思います。

今日のクリスマス礼拝でお読みしました聖書(ヨハネによる福音書 3章 16節~21節)は、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」と記しています。神様が最も愛されたのは、「独り子なるイエス様だったのではなく、世であった」ということになりませんか。驚いてしまいます。けれども、また別の角度から考えれば、愛する人には最大の贈り物をするものです。皆様も結婚された時、愛する夫に自分自身を捧げたのですから、このことはご理解できることですね。神様は世を愛され、世の中の一人の人も滅びないために、神様はたった一人の子を与えられたということですよ。

さて、「世」とは人間の世界です。どれだけの人が生きていることでしょうか。神様に愛される値打ちがあるのでしょうか。勿論、心優しく、才能豊か、頭脳優秀、品行方正、人格円満、眉目秀麗など、特別に優れている人は沢山おられますが、恐ろしい人、残酷な人、欲張りな人、弱い人、ずるい人、情けない人もたくさんいることは皆様ご存じです。そして、どんな立派な人も、長所があっても短所もあります。どんなダメな人も欠点だけではないことをも知っています。人間は良い方向へ向かいたいとは願っていても、自分の力では挫折してしまうのがつねです。二面性、裏表があり、そんな自分の弱さで、苦しんでいます。「世」はそういう人間の世界です。はっきりしない、ぼんやりした、薄暗い闇の力に引きずられて、不安、孤独、虚無、絶望の淵をさまよっているのが人間の世界でしょう。これを聖書では「闇」と言っています。

人間は自分の力では光にはなれません。だからこそ、神様は深い憐みの心、愛する思いを持って、イエス様を光として「世」に送ってくださったのです。弱い愚かな人間を裁き、亡き者にしようとされて送られたのではなく、そんな人々を救い、生き生きと生かすため、闇に輝く光としてイエス様を送られたと告げています。

そのイエス様を見ること、信じる事が「永遠の命」を頂くことなのだというのです。「永遠の命」について、イエス様は「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。(ヨハ 5:39)」と仰っておられます。つまり「永遠の命」= イエス様です。イエス様に繋がっている時に、永遠なる神と繋がり、人として、愛し合って、生き生きと生きると聖書は告げています。それを「永遠の命」という言葉で言い表しているのです。

そして「闇の中にとどまることを好むこと」が、「それが、もう裁きになっている」、つまり、人間が自分で裁きを招いているのだと聖書は言っています。光であるイエス様のほうへ、目を向けることで、闇から抜け出ることができるのです。私たちには、闇の中にとどまっているのか、光の方へ向かうのか、自由に選ぶことが求められているだけです。

イエス様に向き合う、光に向かうとは、具体的にどういう生き方をすればいいのでしょうか。それはイエス様の生き方にならうということです。自分の欲望に負けず、自分のように隣人を愛することです。愛といっても恋愛の愛ではなく、神の愛です。人が生き生きと生きられるように守り、支える愛という意味です。決心のいる、生き方です。なかなかこういう生き方をすることはできません。けれども、人間が弱いことを神様はご存じで、ですからイエス様が助けに来て下さったのです。

私は「光」= イエス様 = 命を支える愛 という言葉をヒントにして、考え、行動したいと思っています。イエス様のほうへ、光の方に、来ること、向かうことを、具体的には、「命を大切にする」とこととりたいと思います。日常の小さな事柄でも、どうしようか、どちらにしようか、と絶えず私たちは考えています。大事なことをする場合には、行動の基準に、「光の方へ」、つまり「命を大切にするほうへ」向かっているか、どうかを考えて、選んで行動することです。

現在、私たちの世界はまさに「闇」の苦しみを味わっています。もっとも深刻な問題は、東京電力 福島第一原発事故の被害です。福島県では生活できない、健康に生きられないという不安、苦しみがあります。核廃棄物を処理できないのに、再稼働という話が起きています。

また、若い人々は非正規雇用というシステムにより、低賃金で働いています。自活し、さらに、結婚し、家庭を築くという将来を展望するのが難しい状況です。

私たち高齢者は本当に死ぬまで安心していただけるのか、不安です。

政府でさえも、様々なことを「記憶にない、記録がない」などと言って隠し、闇に葬ろうとしています。その逆に、戦争ができる準備をしています。これらは「命を大切にする、命を支え、守る」ほうへ、向かっているといえるでしょうか。

イエス様のほうへ、光のほうへ、と向かうためには「命を大切にするほうへ」と向かって、自分の行動をしていく必要があるでしょう。

そして、もっとも重要な行動は祈ることです。いつでも、どこでも、たった一人でもできる行動です。特に、動きが鈍くなってきた私のような高齢者にとって、家の中でも、病気で動けない時でも、お祈りができます。光のほうへ向かいたい、という真心からの願いを神様に申し上げることが出来ることは最大の喜びです。助けを求めるお祈りは、誰でも、どこでも、できる行動です。それと同時に、お祈りをする時、私は不思議なことに平安な気持ちになり、神様から力を頂く事ができるのです。それをいつも体験してきました。感謝の思いで一杯です。

このように、身近なことから、世界的な視野を持って、日々の生活のすべてを、光の方へ、命を大切にする方へ、体を向けることは、イエス様を心に迎えたことになり、神様の愛に触れていくことです。その時、私たちは永遠の命を頂いているのです。永遠の命を頂いた私たちは、私たちの中に「光であるイエス様」を頂いたので、私たちも光り輝く生き方ができるようになるのです。

私たち弘前学院聖愛の校友は、「神の愛」を教えられて、育てられてきました。本当に幸せなことだと感謝いたします。光の方へ一歩でも、二歩でも進んでいきましょう。